様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月３０日現在

機関番号：３４４０９
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2012
課題番号：２１５３０７１１
研究課題名（和文）　メタＴＯＭに基づくＴＯＭ行動の情報処理：大人はなぜ子どもの嘘を見抜けないのか
研究課題名（英文）Information processing in TOM behavior based on Meta-TOM: Why do adults understand children’s deception?
研究代表者
菊野　春雄（KIKUNO HARUO）
大阪樟蔭女子大学・児童学部・教授
研究者番号：00149551

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、大人が子どもの心の理解をどのようにするのかを明らかにすることであった。特に、以下の点について検討した。（１）ＴＯＭ行動の認識における男女差があるのか。（２）ＴＯＭ行動に認識における母親の育児不安や情緒不安がどのように影響するのか。（３）母親の母性とＴＯＭ行動に関係があるのか。（４）顔のどの部位で気持ちを読み取ろうとするのかを検討した。その結果、ＴＯＭ行動の認識については、男性に比べ女性のほうが優れること、育児不安が心の推測に強く影響すること、母性愛の低い母親に比べ、母性愛の高い母親ほど子どもの心のサインを認識することが明らかになった。子ども数などの育児経験は、子どもの気持ちを推測する行動に影響することが認められなかった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify how adults understand children’s mind. It was examined (1) whether the differences between men and women understand children’s TOM behavior, (2) how child care anxiety and emotion anxiety of mothers influence their understanding of TOM behavior, (3) whether there is the relationship between motherly love and understanding of TOM behavior, (4) by what part of face mothers understand TOM behavior. The results showed that women understood TOM behavior more than men did, child care anxiety influenced understanding of TOM behavior, mothers with high motherly love understood children’s sigh. However, the experiences including how mothers cared children did not influence understanding of children’s mind.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	2,200,000	660,000	2,860,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・教育心理学
キーワード：心の理論、母親、育児不安

１．研究開始当初の背景

大人は子どもの嘘など子どもの気持ちを正しく推測できるのであろうか。本研究では、大人の心の理論について明らかにしようと

するものである。大人が子どもの嘘を識別できず、子どもの嘘を大人は容易に見抜けないことが多くの研究で報告されている(たとえば、Keating and Heltman, 1994)。特に、子どもが児童であっても、幼児であっても、大人が子どもの行動や顔の表情から子どもの気持ちを推測することが大変困難であることが報告されている。また、子どものＴＯＭ行動（心の状態を推測させる行動）を認識する際に、大人における差がみられ、子どもの気持ちの推測が容易な人と推測が困難な人がいることが明らかになっている。高ＴＯＭ認識者（子どものＴＯＭ行動について認識の高い母親）に比べ低ＴＯＭ認識者（認識の低い母親）は、目のＴＯＭ情報の処理だけでなく、口や鼻・腕などのＴＯＭ情報の処理に違いが見られた(菊野、2008a,b)。高認識と低認識の母親において、子どもの行動における心の認識に差が見られることが示唆されている。他方、子どもは大人から自分の気持ちを読み取られていると考えているのであろうか。その結果、11 歳以前の子どもは、母親が自分の心的状態を読み取っていると推測する傾向が強かった(Teucher, Mitchell & Kikuno, 2005; Kikuno, Mitchell & Teucher, 2006)。これらの研究から、①子どものＴＯＭが 4 歳以降に獲得されること、②子どもは巧妙にＴＯＭ行動を表出する能力を保持していること、③大人は子どものＴＯＭ行動を読み取ることが容易ではないこと、④大人の読み取りにも個人差があること、⑤自分のＴＯＭは大人によって推測されていると認識していることが仮定される。

２．研究の目的

大人が子どもの心の気持ちをどのように理解するのかを明らかにしたい。特に、以下の点を明らかにしたい。①子どものＴＯＭ行動を認識するための大人の Meta-TOM 処理モデルを明らかにする。さらに、②それらの処理モデルに基づいて、子どものＴＯＭ行動の認識における熟達はどのような処理過程における差によって生じるのかを明らかにする。そこで、本研究では以下の点を中心に検討した。（１）ＴＯＭ行動の認識における男女差があるのか。（２）ＴＯＭ行動に認識における母親の育児不安や情緒不安がどのように影響するのか。（３）母親の母性とＴＯＭ行動に関係があるのか。（４）顔のどの部位で気持ちを読み取ろうとするのか。

３．研究の方法

調査協力者に自分の子どもの心の状態（嘘をつく、悲しいなど）をどのように認識するのかを質問した。特に、調査対象者として母親側要因として、育児不安、情緒不安、母性、子どもの数、子どもの年齢、性別などを要因し、それらが子どもの心の状態を認識する際にどのように影響するのかを検討した。

４．研究成果

（１）ＴＯＭ行動の認識における男女差について検討した。Baron-Cohen(1999)から男性よりも女性のほうが他者の気持ちをより良く推測されることが予想された。その結果、ＴＯＭ行動の認識については、男性に比べ女性のほうが優れることが明らかになった。また、目や表情など顔の部位について、男性よりも女性のほうが優れることが認められた。他方、耳の部位については、女性に比べ男性の方がＴＯＭ行動の認識に優れることが示された。この結果は、男性よりも女性のほうが他者の気持ちの推測が優れることを示唆している。また、これらの結果は、ＴＯＭ行動における認識における男性と女性の差は、相手の心を推測するのに身体のどの部位に注目して情報処理という点に差があることを示唆している。

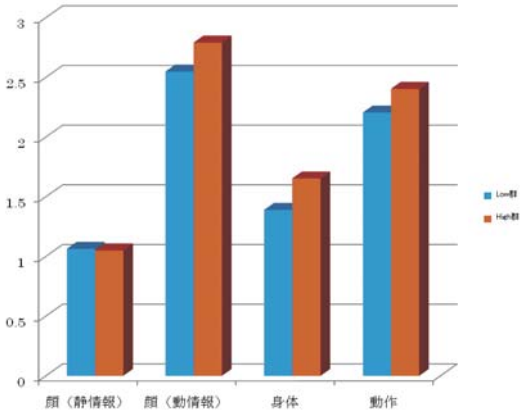

図１　育児不安と子どもの心の認識

（２）子どもの年齢によって、母親の認識に差が見られるのかを検討した。その結果、顔の中の耳や鼻などの変化が生じない部分よりも、眼や口のような変化が見られる部位を手がかりとして、母親は子どもの気持ちを推測していることが認められた。また、子どもの年齢によっても、母親の認識による差が見られた。身体的部位を手がかりとして、子どもの気持ちを推測するかどうかについては、３歳児と５歳児で異なっていた。すなわち、３歳児よりも５歳児で気持ちを推測する場合に、母親は鼻と腕を手がかりとしていることが示された。このことは、子どもの年齢が上がるほど、子どもの細部の情報（鼻の動き

や腕の動きなど微細な動きや変化）を使って子どもの気持ちを推測することが示唆される。

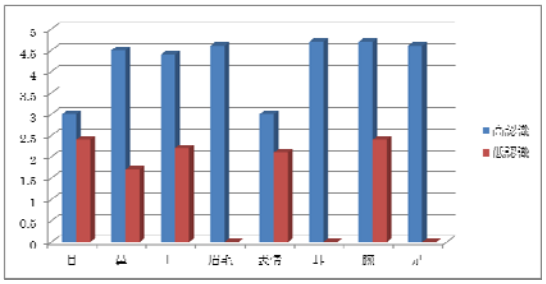

図２　身体部位における低認識者と高認識者との読み取りの差（５歳児）

また、3 歳児では高認識者と低認識者に差が見られたが、5 歳児では有意な差は見られなかった。このことは、目の動きを察知して、子どもの心の状態を推測する際に、心の推測のより敏感な母親とそれほど敏感でない母親との差は、５歳児よりも３歳児で大きいことを示し、年齢が低い子どもほど身体や行動の変化から心の動きを推測することが難しいからだと推測される。

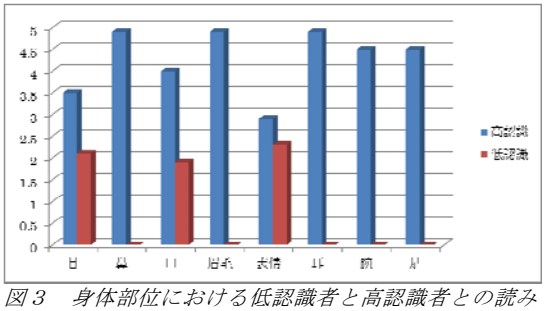

図３　身体部位における低認識者と高認識者との読み取りの差（３歳児）

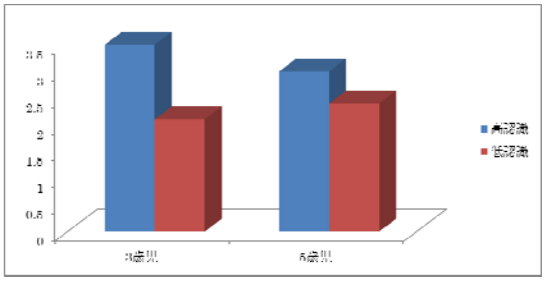

図４　目における心の認識

（３）母親の育児不安と心の推測をするための手がかりの利用について検討した。その結果、鼻や耳など動くことが少ない部位である「静部位」よりも目や口、眉毛など動くことが可能な顔の部位である「動部位」を手掛かりにして、子どもの心の状態を推測していることが示された。特にこの傾向は、育児不安の低い母親よりも育児不安の高い母親でより強く認められた。また、この傾向は女児よりも男児に多く認められた。これらの結果は、育児不安の高い母親ほど、子どもの心の状態に対して敏感であることを示唆している。また、母親は男児よりも女児の心の状態をより敏感に推測できることを示唆している。この理由として、母親にとって女児は同性であり、自分の気持ちや経験をシュミレートすることで推測していることが示唆される。

（４）ＴＯＭ行動の認識における母親の育児不安や情緒不安がどのように影響するのかを検討した。その結果、母親は目、表情、話し方を手がかりとして心の状態を推測していることが明らかになった。特に、育児不安が心の推測に強く影響することが明らかになった。これらの結果は、ＴＯＭ行動を認識の過程において、育児不安や情緒不安が影響していることを示唆している。

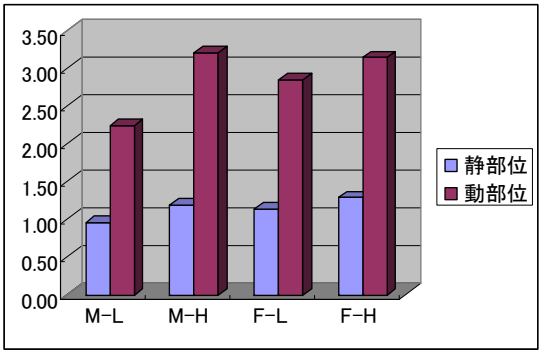

図５　静部位と動部位を手がかりとした母親による子どもの嘘の認識
M-L　：子どもが男児で低育児不安の母親
M-H　：子どもが男児で高育児不安の母親
F-L　：子どもが女児で低育児不安の母親
F-H：子どもが女児で高育児不安の母親

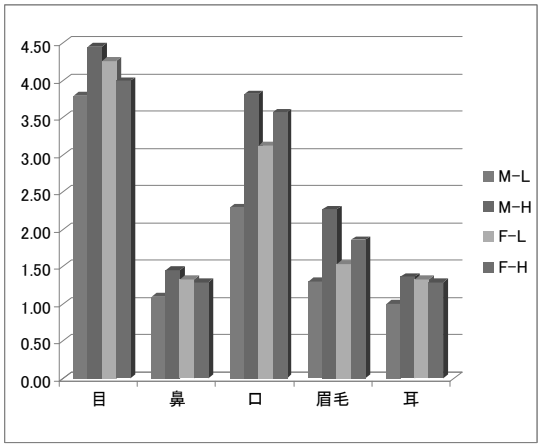

図６　各身体部位を手掛かりとした、母親による子どもの嘘の認識
M-L　：子どもが男児で低育児不安の母親
M-H　：子どもが男児で高育児不安の母親
F-L　：子どもが女児で低育児不安の母親
F-H：子どもが女児で高育児不安の母親

（5）母親の子どもへの愛着の水準と子どもの心の推測との関係について調べた。その結果、母親の愛着が、子どもの気持ちを推測する行動に影響することが認められた。すなわち、愛着の低い母親に比べ、愛着の高い母親ほど子どもの心のサインを認識することが明らかになった。特に、その傾向は顔の静情報よりも顔の動情報で認められた。この結果は、母親が子どもの心の状態を推測する際に、子どもに対する愛着などが強い動機づけになり、心を活性化する心的エネルギーになることを示唆している。

（6）多くの子どもを養育するほうが子どもの心を適切に推測することが仮定される。そこで、養育した子どもの数と心の理論の関係について調べた。その結果、子ども数などの育児経験は、子どもの気持ちを推測する行動に影響することが認められなかった。すなわち、子どもの数が多いほど子どもの心の状態を推測することが認められなかった。また、母親の育児不安との関係について調べた。育児不安は子どもの気持ちを推測する行動に影響することが認められ、育児不安の高い母親の方が子どもの嘘を認識することが認められた。しかし、子どもの数と育児不安との交互作用は認められなかった。これらの結果は、ＴＯＭを活性化するメカニズムに子どもの数のような育児経験が要因であることが示唆されなかった。

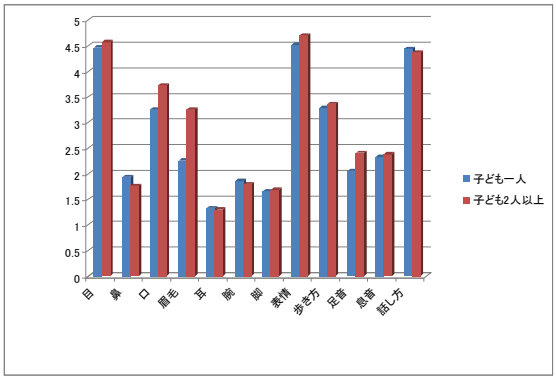

図７　子どもの数と子どもの心の認識

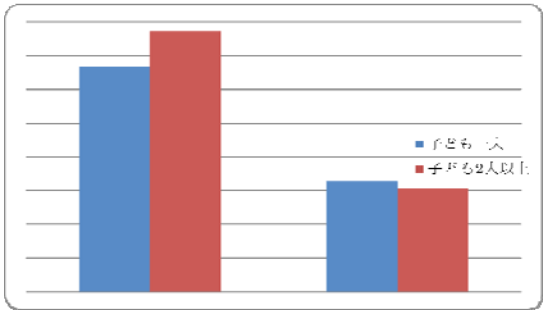

図８　顔の情報に基づく心の認識

（7）子どもの心のサイン認識では、子どもが悲しいと感じているときの母親が子どもの心の状態を、子どもの行動から推測できるのかを検討した。その結果、母親は子どもの心の状態を推測する際に、子どもの目、口、表情、歩き方、話し方の情報を有意に多く使うことが認められた。子どもの数が、一人か二人以上かによって、子どもの心の推測に有意差は見られなかった。また、母親の育児不安が男児と女児の悲しさの認識を妨げるのかについて検討した。その結果、嘘と同じように、悲しさの認識でも男児よりも女児での認識が優れていた。これらの結果は、嘘だけでなく、子どもの悲しい気持ちにおいても、ほぼ同じような傾向が見られることを示している。

以上のことから、母親が子どもの心の状態を認識する際に、育児不安や愛着などが強い要因になることが示唆された。また、対象となる子どもが男児か女児という性別は、母親が子どもの心の認識にとって重要な要因であることが示唆された。他方、養育経験はそれほど強い要因ではないことが示唆された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 菊野春雄（2012）母親の育児不安は嘘の認識を妨げるのか、それとも促進するのか、大阪樟蔭女子大学研究紀要、2、43-45(査読無)

② 菊野春雄（2011）母親の心の理論と養育した子どもの数：母親による子どもの心の推測のメカニズムの検討、大阪樟蔭女子大学研究紀要、1、186-189(査読無)

〔学会発表〕（計 10 件）

① Haruo Kikuno（2012）Mother’s Theory of Mind: How do mothers understand children’s minds? *British Psychological Society Developmental Section Annual Conference 2012.*

② 菊野春雄（2011）母親の育児不安とうその認識：母親の育児不安が男児と女児の嘘の認識を妨げるか。日本乳幼児教育学会第 21 回大会

③ Haruo Kikuno（2010）Can Women understand children’s mind easily?, *British Psychological Society Developmental Section Annual*

Conference 2010

④ Haruo Kikuno (2010) Mother's theory of mind: Does motherly love effect on mother's understanding their children's mind? *Asean Regional Union of Psychological Societies 3rd Congress 2010*,

⑤ 菊野春雄 (2010) 母親による子どもの心の認識のメカニズムの検討、日本心理学会第 74 回大会

⑥ 菊野春雄・中野香苗 (2010) 子どもへの親近性と心の認識：何が子どもの心の認識に影響するのか、日本教育心理学会第 52 回総会

⑦ 菊野春雄・中野香苗 (2010) 母親の育児不安と子どもの嘘：母親は子どもの嘘を推測できるか、日本発達心理学会第 22 回大会

⑧ 菊野春雄 (2009) 他者のＴＯＭ行動の認識における個人差、日本教育心理学会第 51 回総会

⑨ 中野香苗・菊野春雄 (2009) 母親による幼児の心の理解、日本乳幼児教育学会第 19 回大会

⑩ 菊野春雄・中野香苗 (2009) 母親の情緒不安と心の理論について、日本乳幼児教育学会第 19 回大会

６．研究組織

(1)研究代表者

菊野　春雄 (KIKUNO HARUO)

大阪樟蔭女子大学・児童学部・教授

研究者番号：00149551

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし